

北九州市立大学 文学部紀要

第88号

Adventures of Huckleberry Finn における暴力描写の特質について
—作品構造の統一性を巡って

前田 讓 治 ……………53

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2018

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 88 March 2018

Idiosyncratic Representation of Violence in *Adventures of Huckleberry Finn*

Johji MAEDA53

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2018

Adventures of Huckleberry Finn における暴力描写の特質について —作品構造の統一性を巡って

前田 譲 治

序論

Adventures of Huckleberry Finn (1885) は、13、4 歳 (118) の Huckleberry Finn の視点から作品内容が語られる設定にありながら、致命的な暴力が頻出し、暴力によって落命や負傷する人物が多い。これほどまでに大きな存在感を有する暴力描写でありながら、本作の作品論において、暴力描写が断片的に議論される事例はあるが、暴力に特化した論考は極めて希少である。暴力に特に焦点を当てた論考としては、「トウエインと暴力」において、金谷良夫氏が『ハックルベリー・フィンの冒険』の暴力批判の諸相を論考している (113-30)。この論考以外に、『ハックルベリー・フィンの冒険』の暴力描写に特に焦点を当てた、書物形式で公表された論考は、寡聞にしてない。そこで、本稿においては、『ハックルベリー・フィンの冒険』の暴力描写の本質に肉薄する試みを、作品構造の統一性に注目しつつ展開したい。ただし、本作には膨大な暴力描写が登場するため、致死性を伴わない粗暴性や、子供への体罰、恫喝目的の暴力などは考察の対象外とする。つまり、取り上げる暴力は殺害意欲に支えられた致死性を伴ったものに限定する。ただし、その条件に合致した場合は、ハックの想念において展開する暴力も考察の対象とする。なぜなら、本作において想念における暴力の叙述は作品構造の統一性に寄与しており、重要な作中要素と位置付けられるからである。以上の前提の下に、暴力描写の特質が、暴力描写とは一見無縁と映る作品構造と緊密に連動している事実を明らかにしたい。さらに、この事実を踏まえて、Mark Twain の暴力観の特質を明示したい。

I ハックと暴力

暴力的な pap からの追跡を逃れる必要に常にかかられているハックが、彼の素性を隠蔽するために繰り返し提示する嘘 (虚構) や、ハックの想定の中には、死が横溢している (Beidler 82-84)。それらの死は、ハック自身が死ぬ想定と、ハック以外の人物が死ぬ想定之二種に大別でき、両者は性格を異にする。つまり、三ヶ所のみ登場する、ハックが想定する彼自身の死 (45-46, 108, 134) は、全てが他者からの暴力に起因する。この三ヶ所以外の、ハックが創作する他者 (彼の知人や近親者等) の死は、死因が記載されている場合、例外なく事故死 (84, 143, 230)、もしくは、病死 (70, 119-20) である。

以上の差異に加えて、ハックが虚構を創作する際の積極性に、多大な濃淡が見られる。まず、

ハックは、父親からの追跡を回避するため、自分が強盗によって殺害されたという誤解を村人に喚起するための諸状況を、物理的に作り上げる。この際に、ハックは作業後に“I was pretty tired . . .” (46). と表白するほどの肉体的負担を負っている。場面変わって、他人の筏に無断乗船したハックが乗組員から誰何された際に、ハックは盗み聞きしていた、一乗組員による昔語り登場人物の名前“Charles William Allbright”を偽名として用いる。それが偽名であると瞬時に判別した船員たちは、“Then they roared . . .” (108). という反応を偽名に対して示す。つまり、無数の選択肢がある中で、詐称として最も不適当な偽名をハックは選択している。しかしながら、父親に殺害された赤子の名前をハックが偽名として敢えて選択した事実には注意すれば、ハックの選択の背後には、自分が暴力によって殺害される想定への傾倒を読み取ることが可能である。この解釈は、Grangerford 家と他の名家との戦闘場面におけるハックの発言を分析することにより、説得力が増す。

その場面において、筏の中に隠れていた逃亡奴隷 Jim は、筏に戻ってきたハックに対して、以下の通り語りかける。

“Jack’s been heah, he say (a)he reck’n you’s ben shot, kase you didn’ come home no mo’; so I’s jes’ dis minute a startin’ de raf’ down towards de mouf er de crick, so’s to be all ready for to shove out en leave soon as Jack comes agin en tells me for certain you *is* dead. (b)Lawsy, I’s mighty glad to git you back agin, honey.” (134)

以上のジムの発話に対するハックの返答は、“‘(c)All right—that’s mighty good; (d)they won’t find me, and (e)they’ll think I’ve been killed, and floated down the river—(f)there’s something [Buck’s corpse] up there that’ll help them to (g)think so . . .’” (134). と描かれている。(以上、下線部と記号付与は筆者による。) ハックの返答の冒頭の (c) における積極的肯定は、その直後に続いている (d) と (e) の発言から判断して、下線部 (a) のジムの発言と対応している。この、ハックの発話の照応関係を視野に入れると、下線部 (a) に見られる、Jack (グレンジャーフォード家所有の黒人奴隷) による、ハックが死んだという事実誤認を、ハックは積極的に歓迎していると判断できる。しかも、ハックはジムに“[D]on’t you lose no time . . .” (134). と警告し、戦闘による危険が迫り筏の出奔を急ぐべきと認識している最中に、下線部 (a) のジムの発言の実質的な同語反復を、ハックは下線部 (e) と (g) に見られる通り二度も行っている。対照的にハックは、下線部 (b) でジムが表白した情愛の念を完全に黙殺している。それゆえ、下線部 (c)・(e)・(g) からは、自己が暴力によって殺害される想定にハックが固執している事実を指摘できる。この解釈は、別場面の考察によって補強される。

自分に親愛の情を示し続けてくれた、グレンジャーフォード家の子息 Buck の死に言及すること

への強い嫌悪感をハックは繰り返し表白している (132, 134)。しかしながら、上記引用 (134) においては、忌避すべきは必ず、バックの死体への言及を必要でないにもかかわらず、下線部 (f) の通りハックは行っており、ここには自家撞着を指摘できる。ハックは、バックの特徴として、ハックとの年齢の近さ (118)、手入れが行き届いていない頭髪 (118-19)、身だしなみを整えることの強制への拒絶姿勢 (119)、強いられている服装への拒絶反応 (119) などを挙げている。これらは全てハック自身の identity や感性と重複しており、ハック自身の諸々の側面が、ハックとは身分違いの名家の一員バックに投影されている。さらに、ハックはグレンジャーフォード家で生活するに当たって、素性を隠すために偽名を用いる。ところが、自身で口にした偽名をハックが翌日に失念したのとは対照的に、バックはその偽名を暗誦しており、偽名を忘れて苦慮しているハックの誘導に応じて、その綴りを紙に書ける。つまり、グレンジャーフォード家内での名称という極めて重要なハックの identity を、ハック以上に把握する人物としてバックは提示されている。以上を勘案すれば、バックはハックの分身的存在と位置付けられる。そのため、バックの射殺死体は、ハックの死体としての色彩も帯びている。そうであるならば、自身が暴力によって殺害される想定を好むハックの嗜好が、バックの死を悼む感性を圧倒するほどに強靱であると解釈すると、ハックに認められた自己撞着が解消する。以上の通り、本章で考察対象とした三場面において、ハックの嗜好の方向性に揺らぎはない。

一方、他者の病死・事故死を虚構（嘘）として提示する際のハックも、嘘の選択肢が無数にある中で、敢えて死を選択している。しかしながら、この場合においては、暴力によるハック自身の死が想定された既出の三ヶ所とは異なり、危険性や労力などのハックが払う犠牲が絶無で、この点で虚構を提示する際の積極性は相対的に低い。つまり、虚構の創出に際して死が作為的に取り上げられているとはいえ、死への言及自体は目的化するには至っておらず、方策としての色彩が勝っている。

Beidler の論考に再度目を向けると、ハックが創出する虚構（嘘）内の、諸々の要因に起因した死を等質的に捉え、虚構にハックが種々の死を導入する傾向の背後に、ハックが明言を避けている、厭世的な自殺願望を読み取っている (83)。同様に、ハックによる野豚の殺害に “[Huck’s] desire to end his own miserable life” を読み取る向きもある (Lynn 211)。しかしながら、名家同士の戦闘場面において、ハックは安全な場所の確保に腐心し (132)、バックの死体を覆った後は、“got away as quick as I could” (134) と行動し、常に保身を図っている。また、Colonel Sherburn が Boggs を射殺する場面に居合わせたハックは、ボッグズの死に際が良く見える場所を我先に確保する (159)。ところが、ボッグズの死体が観察し易い場所の占有に関して群衆同士の争いが生じるや、“There was considerable jawing back, so I slid out, thinking maybe there was going to be trouble” (159). という反応を示し、固執していたはずの、ボッグズの死体が良く見える場所からハックは保身のために急遽退

散する。あるいは、アルコール依存症の父親が錯乱状態となり、ハックをナイフで殺害する寸前に至ると、父親が寝入った後に、ハックは弾丸の装填状況を慎重に確認した上で、銃身を睡眠中の父親に躊躇なく向けている。自身を殺害せんとする父親の射殺を全く厭わないハックに指摘できるのは、生存に対する強靱な執着心であり、それは自殺願望の対極に位置している。Phelps 農場で捕縛されたジムを小屋から救出する場面でも、不審者への発砲を厭わない武装農民が多く待機している事実を事前に把握しているハックは、“... I told Tom as quick as I could, we must jump for it, now, and not a minute to loose...” (277). と述べ、急ぐように Tom Sawyer に促す。続いてハックは“‘Hurry! hurry!’” (277) と叫び、行動が緩慢なトムに迅速な行動を強く要求している。このようにハックは、銃撃の被害の回避を強く念頭に置いて行動している。では、以上に確認できた、生存へのハックの執着の強固さと、自己が暴力によって殺害される状況を積極的に想定する嗜好とは、どのような関係にあるのだろうか。

ボッグズが銃撃された際のハックの反応を見ると、“... I rushed and got a good place at the window, where I was close to him [dying Boggs] and could see in” (159). とあり、さらに、ボッグズの銃創を凝視している。このように、銃撃されたボッグズの死に際に、ハックは好奇の眼差しを向けている。¹その後、ボッグズを殺害したことを口実として、群衆はシャーバン大佐をリンチにかけようとする。するとハックは、既に眺めた通り、悶着に巻き込まれる危険性を懸念し群衆との間に距離を置いていたにも関わらず、シャーバン大佐の自宅にリンチ目的で押し掛ける狂騒状態の群衆に迷わず同行している。以上のハックの行動からは、暴力行為を観察することへの強い執着心が指摘できる。それゆえ、“The voyeuristic fixation with violence” (Levy 170) がハックには指摘されている。

上記のハックの嗜好に注意しつつ、彼の実際行動を再確認すると、先に眺めた通り、錯乱状態の父親がハックの殺害を試みた際には、父親を射殺する決断を即座に下していた。さらには、追跡されることなく父親の元から逃亡する計画の実現のために血が必要となるや、豚を銃で撃ち殺し喉を切り裂いている。ハックが釣りを行った際も、“haggled him open with my saw” (51) との記述があり、ナマズの腹を裂いた事実のみが言及される。ところが、釣ったナマズをジムが処理する段になると、“... Jim cleaned him with his knife...” (54). と描写され、暴力性が後退する。その一方で、ナマズを釣る際の餌となる、ハックが準備した兎の肉は、“skinned” (65) と記されている。ハックが作品の叙述を展開している事実を勘案すれば、彼は自己の行動の暴力性に焦点を当て続けており、実際行動におけるハックの暴力志向も指摘できる。

他方、ハックは幼少であるため、彼が暴力の対象として選択できるのは、動物や睡眠中の人間などの無力な存在に限定される。この事実と関連するのが、ハックが Jackson’s Island で逃亡奴隷ジムと遭遇する場面である。Beaver は、二人きりのこの場面において、ジムの頑強な肉体と、ハック

クが置かれた状況（ハックは死んだと皆から誤認されている）ゆえに、ジムがハックを容易に殺害できる立場にあることに着目する。それを踏まえて Beaver は、ジムがハックを殺害しないのは、ジムの特段の選択の結果であると解釈している（“Run” 190）。つまり、ハックは逃亡奴隷ジムに対してすら、暴力行使の自由度の点で劣位に立つ。それゆえ、ハックが、現実においては行使対象に関して大幅な制約を受ける暴力志向を、想定・虚構の中において自在に発散させようとするのは自然な成り行きといえる。しかも、ハックは自己否定を反復しており、ここには、自己を無価値、あるいは害毒と位置付ける意識の強さが顕著である（24, 222, 223, 235）。そうであるならば、想念の世界において、ハックの暴力志向が自分自身に対して向けられるのは必然的な帰結とすら考えられる。

そうであるならば、暴力が自己を死に至らしめる状況を熱心に想定するハックの姿勢は、現実における彼の暴力志向の、想念の世界における延長と位置付けることが可能である。虚構（嘘、想念）の内部においてであれば、保身が完全に保障された形で、自己が殺害されるに至るまで、いわば、究極の直近での暴力の観察が可能となる。この在り方は、ハックの二つの嗜好、すなわち、保身と暴力の鑑賞・行使の愛好という、現実世界においては両立困難な要素の共存を実現するものである。このように、現実では制約によって自在には展開できない暴力志向を、諸制約から解放する点に、ハックが既出の三場面において創出する虚構の本質が存する。

ここで、作品を一読すれば容易に把握できる、主観的な好悪の念を直接的に吐露し続けるハックの性向に注意したい。この傾向にもかかわらず、彼の暴力志向に関しては、ハックは嗜好を一度として口外せず、この点で例外的記述を展開している。だからこそ、ボグズが殺害された際のハックの反応に関して、“Huck Finn is the one sympathetic witness of the slaying [of Boggs]. . . Huck is naïve, his simple compassion is preferable to the ‘smart’ sensation-seeking of the empty-headed mob” (Covici 15-16). という、既に確認した実情から完全に乖離した評価が下されるのだ。同一場面のハックの感情に関しては、“Everyone is tremendously pleased—except Huck . . .” (Lynn 237). という、極めて類似した指摘もなされている。これらの、ハックの実際と齟齬を来す解釈の存在は、自身の暴力志向の明示を完全に回避し続けるハックの叙述の特性の証左といえる。この特性は、父親から追われる可能性を消去した上での逃亡を可能にする計画を、ハックが実行に移す場面の分析により、さらに明確化する。

この場面において、ハックは案出した名案を “the very idea I wanted” (44) と思わせ振りに紹介するが、その具体的内容を一言も明かさぬまま、実行に移す。その名案を遂行する過程においてハックは、“I wanted an axe, but there wasn’t any, only the one out at the wood pile, and I knowed why I was going to leave that” (45). という記述を皮切りに、手順を逐一記載している。この状況にあって、実は、読者とハックとの間に知力の優劣関係が必然的に生じる。まずハックは、“‘That man warn’t

here for no good. I'd a shot him'”(44). という父親の発言を耳にした瞬間に、先の名案(44)を創案している。他方、読者は、ハックが着想を得る契機となった父親の発言(44)に加えて、ハックの名案の遂行に向けての手順を逐一、ハックから報告される(45-46)。このように、ハックの名案に関する複数のヒントを矢継ぎ早に与えられている読者が、ハックの名案の骨子を看破できない状態が継続すれば、父親の一言のみから名案を案出したハックに、知力や機転の点で後塵を拝することになる。(常識的に考えて、父親の一言のみから、ハックと同様に名案を一瞬にして創出できる読者は極めて稀少であろう。)この劣位から読者が脱却するには、ハックの諸行動(個々が、ハックの名案の骨子を知る上でのヒントとなっている)から彼の意匠を早急に看破することが必要であり、読者は自ずと、その看破に注力せざるを得なくなる。他方、ハックは、計画の実現に必要な血を手に入れるために、作業過程において躊躇なく豚を撃ち殺し、喉を切り裂いている。その後、彼は豚の死骸に重しを付けて川に投擲している。これらの一連の行動は、暴力性の発露がハックの常態である事実を示唆する。一方、先に確認した知的劣位に置かれている可能性が極めて高い大半の読者は、豚の射殺がハックの計画にどのように組み込まれているのかを看破することに神経を集中せざるを得ない。その結果、読者がハックの行動の暴力的側面を冷静に把握する余裕は失われる。ここで、本段落で取り上げたハックの名案の実行の前後の箇所(38-39, 46)において、彼は計画を行動に移す前段階において、その計画の詳細を明かしている事実注意到したい。ところが、本段落で取り上げた行動に関しては、例外的に、計画の細部が行動に先行して一切明示されていない。この例外的な叙述配列こそが、ハックが表出する暴力性への読者の注目を回避させる効果を挙げている。やはり、ハックは作為的に自己の暴力性を隠蔽している。

以上のような、ハックの叙述の戦略的側面と、本稿で取り上げた三場面に見られたハックの虚構が、彼の暴力志向の発散の場としての機能を有しながら、この事実を読者が認識しづらい叙述方法を採用している在り方(例えば、既出の Beidler はハックの自殺願望の反映と解釈)とは、完全に調和している。加えて、ハックの保身欲の強靱さも繰り返し描かれていた。それらの結果、ハックの想念における自身をも対象とする彼の暴力志向が、読者から認識される可能性は低下するだろう。このように、ハックは一貫して、自己に暴力志向が内在しないという、実情と乖離した印象を読者に与える叙述を採用し続けている。換言すれば、ハック個人と、彼の暴力志向とを完全に分断しようとする、彼の叙述の方向性が認められる。この在り方は、ハックの周囲において暴力行為を実行している人物の描写と、どのような関係にあるのだろうか。この点を以下に考察し、本作における暴力描写の基調を確定したい。

II 暴力の行使主体の個別化の回避

Phelps 農場で捕縛されているジムを盗み出そうとする一団がいるとの、トムが捏造した警告文が契機となって、ジムが強奪されることを警戒して、農場には武装農民が参集する(40章)。武装農民をフェルプス農場に呼び寄せたのは、虚偽の警告文を最初に目にした農場主 Silas Phelps 以外にはあり得ない。それゆえ、ハックが遭遇する、ジムの強奪に備えて警戒している農民(全員が銃で武装)にサイラスが含まれない可能性は絶無である。この事実を踏まえつつ、武装農民と遭遇したハックがバターを帽子の中に隠していたため、それが溶解し流出する場面に注目したい。ハックの額上の溶解したバターを見たサイラスの妻 Sally は、それを脳膜炎によって流出した脳髄と誤解し、“[H]e’s got the brain fever as shore as you’re born, and they’re oozing out!”(277)と病名を具体的に叫ぶ。その病名を聞きつけた武装農民全員は、フェルプス家の一員である少年の安否を気遣い、“And everybody runs to see…”(277)と反応し、ハックと最接近する。武装農民に含まれているサイラスは、ハックの叔父にあたる。(ハックはフェルプス家に到着後は一貫してトムと詐称しているため、サイラスはハックを、甥トムと誤認している。)それゆえ、サイラスの親族であるハックの安否への彼の気遣いの度合が、血縁関係が不在の隣人達と同一であるはずがない。つまり、サイラスは、甥と認識しているハックの脳髄の流出に対してサリー同様に、際立った動揺を示したはずだ。このように、サイラスの姿勢には弁別性が間違いなく想定されるにも関わらず、武装農民の動作の主語として登場するのは、“everybody”のみである。結果的に、ハックの異変への武装農民全員の反応は等質的に描かれ、サイラスの個別的描写は一切見られない。その結果、先に確認した実情とは齟齬をきたす、サイラスが武装集団に含まれない印象が醸し出されている。加えて、ハックが耳にする武装農民の発話の叙述も、発話内容をハックが要約して伝える間接話法を通してなされ、結果的に、農民たちの個人名は会話中に一度も登場しない。

以上に見た、武装農民に係る徹底した個別化回避とは対照的に、サリーは、行動や発言内容(直接話法による)が、個別的に描かれている。本作では、銃は未成年を含む男性によってのみ独占的に使用される一貫性が存在するため、本場面においては、暴力の表象たる銃と無縁の女性一名のみが個別化されている。他方、武装農民はその後、ジムが捕縛されている小屋の見回りを行い、その際に一人が“[K]ill ’em when they come…”(277)という、暴力性に富んだ発言を行うが、その発話の主は“a man”と表記され、やはり個別化されていない。その直後にハックとトムは、ジムを小屋から逃亡させる(278)。その際に物音に気づいた武装農民は、物音に向けて銃を乱射する。この際の様子には、“Then there was a rush, and a *bang, bang, bang!* and the bullets fairly whizzed around us!”(278)と描写されている。この文においては、“a *bang*”と“the bullets”が主語として選択され、銃撃を行う武装農民に全く言及がなされない。このように眺めると、40章において、致命的な暴力性と不可分の関係にある武装農民の個別化の回避が徹底されていることが分かる。この在り方を踏

まえつつ、42章のサイラス描写に注目しよう。

42章はフェルプス夫妻の会話を以て幕を開ける。次いで、再度捕獲されたジムと負傷したトムが複数の男性によってフェルプス農場に搬入される。すると、時を移さずしてフェルプス夫妻は、自宅に搬入されたトムの看病のために家の中に入り、サイラスは場面から消失する。この直後に登場するのが、“some of them”による、ジムを罰として縛り首にすべきとの提案である(287)。次いで、村人(“they”)はジムを殴打し、さらにはジムの待遇の過酷化について相談する(288)。このような、ジムに対する村人の暴力的な発言は全て、ハックの視点からの間接話法を通して、その要旨のみが伝えられる。その結果、登場人物の固有名は全く登場せず、暴力的な言動に出る村人は一切、個別化されない。ここで注意すべきは、逃亡奴隷ジムを捕獲したと詐称している詐欺師に40ドルを払ってジムを引き取り、200ドルの懸賞金をジムの所有者から受け取る権利を有しているのがサイラスである事実だ(220-21)。(ただし、ジムの懸賞金に関する情報は詐欺師による捏造であるため、懸賞金を所有者から受け取ることは現実には不可能である。)当然、ジムに対する処遇の決定権を有するのも、捕縛されたジムを今まで管理し続けたフェルプス夫妻である。以上の前提にも関わらず、ジムに対する暴行がなされジムの処刑すら議論される場に、夫婦は不在なのだ。次にサイラスが登場するのは、逃亡奴隷の所有者サイラスとの相談なしに決定された、ジムの処遇の過酷化が実行され、村人が全員引き上げた後である(289)。以上の通り40章以降に、サイラスの不在が、不自然な形で再三生じている。しかしながら、反復的に登場する不自然な状況設定は一樣に、サイラスを暴力性から隔絶する効果を生み出している。明らかに、作者は作為的に、サイラスを暴力性から分断している。このような作者の姿勢は、サイラスの人物造型に着目すると、さらに明確化する。

まず、サイラスは頻繁に事実誤認に根ざした奇矯な発言や行動を行う(235, 258-60)。あるいは、ハックの視点から紹介されるサイラスの説教の様子も諧謔的である(292)。それゆえ、サイラスに対しては“[Silas’s f]alse assumptions are frequently utilized for humorous purposes . . .” (Wieck 158). という指摘がなされている。あるいは、サイラスの人物像に関して、“foolish”、“gentle”、“absent-minded” (Shulman 335)、“the befuddled husband” (Walker 179)、“the good-hearted Silas” (Walker 179-80)、“good-hearted” (Wieck 164)などと指摘されている。以上の通り、サイラスの人物像においては、諧謔性と善良性が確固たる基調となっている。加えて、サイラスは、自宅にやって来た見知らぬ少年(実は素性を詐称しているトム)を饗応する親切心を示す(236)。その見知らぬ少年(トム)は、姻戚という真の素性を隠したままサリーにキスをする。その際に、サリーは少年の非礼に激怒し暴力に訴える寸前に至る。それとは対照的に、サイラスは戸惑うものの怒ることはなく、温厚な人柄が際立っている(237)。その上、サイラスは農場に捕縛されている逃亡奴隷ジムと共に毎日祈り、タバコといった嗜好品もジムに提供している(255)。その結果、フェルプス夫妻はジム

から “kind as they could be” (255) と評されている。加えて、ハックもサイラスを、“the innocentest best old soul I ever see” (235)、あるいは、“He was a mighty nice old man. And always is” (260). と評している。以上の通り、ジムとハックの視点を通して、暴力性とは相容れない人物像がサイラスには配置されている。この在り方は、すでに確認できた、サイラスと暴力性との連結を徹底して忌避する作品構造の再来と言える。

以上の、サイラスの人物像との関連で注目すべきは、捕縛された逃亡奴隷ジムが詐欺師の過去の悪行をフェルプス農場で暴露したことが原因となって、詐欺師がリンチにかけられる展開だ。作中では例外なく、リンチは対象の殺害を目指している (160, 199, 212)。そのため、リンチに遭った詐欺師は最終的には殺害されたと推測される。詐欺師は、彼らの悪行が原因で及びそうになったリンチを何度も回避した実績がある (137, 138, 167-68, 171-72)。そのため、詐欺師の悪行に関する情報を最初に得たサイラスは、詐欺師が殺害される主因と位置付けることもできる。ところが、詐欺師の運命に関してサイラスは、“[B]ecause the runaway nigger [Jim] told Burton and me all about that scandalous show, and Burton said he would tell the people . . .” (239). と述べている。この発言ゆえに、詐欺師の殺害の要因は、サイラスの言動ではなく、Burton による村人への情報の流布に帰される。他方、バートンが話題となるのは、この一回限りであり、個別化されているとはいえ実体は不在に等しい。つまりバートンは、サイラスの言動と詐欺師殺害との連動を回避させる役割のみを担って作品に登場している。加えて、サイラスはリンチの帰結（殺害）を、“. . . I reckon they’ve drove the owdacious loafers out of town before this time’” (239). と指摘している。このように、リンチの実情よりも暴力性が大幅に緩和された表現をサイラスは用いている。以上の通り、サイラス個人と暴力性との連結を回避せんとする作為性が確実に存在している。類似した作為性は、作中で暴力性が最も濃厚な、Shepherdson 家とグレンジャーフォード家との戦闘場面にも指摘できる。

この場面においてハックは安全な木の上から両家の戦闘を遠巻きに眺めている。その際にハックは、遠方に位置しているためにどちらの名家の一員かが不分明な二人の少年の一人 (“one of the boys”) が、敵方に銃撃を命中させる様子を目撃する (133)。その直後に、二人の少年はハックが隠れている木の真下に退避して来るが、その際に初めてハックは、“One of the boys was Buck, and the other was a slim young chap about nineteen years old” (133). と認識する。つまり、ハックが遠距離ゆえに二人組が誰であるかを全く認識できない状況において、二人組の一人が銃撃で敵方を倒す設定となっているため、銃撃の動作の主はハックの視点からは、“one of the boys” (133) と表記する選択肢しかない。その結果、銃弾を敵に命中させた主体に匿名性が賦与されている。

その後、木の上のハックと対話していた二人の少年は射殺される。しかし、その直前においては、ハックの注意がバックとの会話に傾注されているため、二人に銃弾が命中する瞬間は、“All of a sudden, bang! bang! bang! goes three or four guns . . .” (133). と銃声のみが提示され、銃撃を行った

主体への言及がない。この記述は、フェルプス農場でトムとハックが銃撃を受ける際の既出の描写 (278) と酷似している。続いて、“[T]he men run along the bank shooting at them [Buck and a young chap] . . .” (133). という描写が登場する。この際も、“the men” という主語の使用により個別化が回避され、かつ、殺人を行う際の動作も、“shooting” という現在分詞で表現され、主語と直接対応する述語として提示されていない。このように本場面においても、殺人を行う人物の個別化が、徹底して忌避されている。

加えて、殺し合いを延々と継続している両家に関してバックは、“‘There ain’t a coward amongst them Shepherdsons—not a one. And there ain’t no cowards amongst the Grangerfords, either’” (129). と指摘している。引用の前後の文脈から判断して、ここでの“cowards”とは、死を恐れずに敵方の殺害に専念する姿勢からの逸脱を意味し、両家が同一行動様式を共有していることをバックは指摘している。さらに、14歳前後(118)のバックは成人と同等の、敵方への殺害意欲を有し、実際に敵方の殺害を試みている。つまり、男性は両家の何れかに生を授かった時点で、致命的暴力への傾倒を運命づけられている。所属する家系や年齢を超越した、男性の行動様式の極端な均一化を通して、登場人物の非個性化が展開されている。

場面変わって、Wilks家のエピソードの中にも、群衆による“‘Le’s duck ’em! le’s drown ’em! le’s ride ’em on a rail!’” (212) という、二組現れた遺産相続人を真贋の区別なく共にリンチにかけようとする、殺意に支えられた暴力的発言が見られる。この直接話法で提示されている発話の主語にも“they”が用いられ、匿名の複数人の発話として提示されている。以上の通り、暴力性を発露する主体の個別化の忌避こそが、作品全体を貫く統一的様式なのである。

Ⅲ 暴力の行使者の個別化

しかしながら、例外的に一名のみ、殺人を実行する人物が個別的に描かれている。それは、ボッグズに罵倒されたという理由で、彼を群衆の面前で射殺するシャーバン大佐である。しかしながら、ボッグズの殺害に関して、“In effect, the slaughter of Boggs occurs, public laws and codes of honor notwithstanding, because the people of Bricksville permit it” (Robinson 121). という指摘がなされている。また、シャーバン大佐はボッグズから最初に罵倒された際に、彼が一定時刻後も罵倒を続けた場合は彼を殺害するとの警告を下す。しかし、この警告後も、ボッグズはシャーバン大佐を罵倒し続ける。その際、“a friend on both sides of him [Boggs] ahold of his arms and hurrying him along” (158) という描写の通り、群衆の数人は、ボッグズが殺害されることを懸念して、シャーバン大佐からのボッグズの隔離を試みていると映る。しかし、その一見保護的に見える姿勢の本質は、以下の通り説明されている。

Boggs is being hurried *toward* Colonel Sherburn, not away from him. . . . These “friends” are deliberately hurrying Boggs along to the final act of his tragicomedy. If they did not take charge of him, he might wander off and escape what they have come to regard, with his help, as his destiny. The desperately bored and drama-hungry townspeople *must* have the shooting of Boggs; they cannot risk its not happening. (Carrington 73)

つまり、ボグズの殺害の回避を目指しているとの印象を与える人物は、実はボグズが確実に殺害されることを狙っているのだ。以上の通り、周囲の群衆の姿勢をボグズの殺害の要因と解釈する方向性が確立されている。実際に、ボグズが殺害されると即座に、群衆はそれを口実として、シャーバン大佐のリンチを一致して目指し、全員が究極的狂騒状態に陥る。このような、殺害の見物を希求する場の空気の圧倒的存在感を確認すれば、先の二つの引用に見られた解釈には妥当性が認められる。つまり、ボグズの殺害は、シャーバン大佐の単独行動ではなく、不特定多数の群衆との共同作業として提示されている。加えて殺害の瞬間の描写も、“Bang! goes the first shot . . . bang! goes the second one . . .” (158-59). と、銃撃を行うシャーバン大佐を主語としない文構造が用いられている。(この文構造は、ハックとトム、あるいは、バックが銃撃される際の二場面を採用されていたものとの類似性が強い。) とすれば、シャーバン大佐に関しても、暴力の主体を個人に帰する構図が回避されている。この事実と、本作の原稿の改訂の過程も完全に照応している。

詐欺師の一人である duke は、自分の過去の悪事を知るジムが捕縛された際に、ジムが彼の行状を密告することを懸念し、ハックに対して“‘Do you reckon that nigger [Jim] would blow on us? We’d skin him if he done that!’” (225) と恫喝する(下線部は筆者による)。しかし、草稿段階で下線部は“‘I’d’”であった(Doyno 66)。この主語に関する改訂にも、公爵の暴力性を個人に帰す構図の忌避が読み取れる。

同様の視点から瑣末的人物にも目を向けると、難破船で、Jim Turner(殺人の前歴を持つ)を殺そうとする二人組に対しても、Bill と Jake Packard という固有名が与えられている。その際に二人は、水没が迫っている難破船の中に縛られたジムを放置し溺死させることを企図する。この点を察知したハックは保安官に犯罪行為を伝えるために、乗りつけた筏で難破船から退散しようとする(80)。ところが、船に係留していた筏が流されたためハックは止む無く、二人組が準備していたボートを用いて脱出する。その結果、二人組は、ジムと共に船に留め置かれ溺死を余儀なくされる。このように、固有名が与えられた二人は、企図していた殺人行為を主体的に行えなくなり、暴力性との関連性が途中で霧消するのである。

次いで、Mary Jane Wilks に目を向けると、彼女は、自己の利益を違法に棄損しようとする人物の存在をハックから指摘されるや、“‘[W]e’ll have them [the frauds] tarred and feathered, and flung in

the river!’ ” (199) と叫び、その人物に致命的暴力性を示す。彼女には、初対面のハックが口頭で伝える情報の真偽について思案する節、あるいは、ハックが *Walter Scott* 号の場面で示した (80)、法秩序に処理を委ねる発想が皆無である。このように、彼女は殺意が付随する暴力性を安易に示す。しかし、メアリーの暴力性に着目した論考は寡聞にして存在せず、多数の論者が彼女の精神性の崇高さを一方的に称揚している (Walker 183-84, Fulton 78, Gabler-Hover 793, Sloane 101, Harris 75)。このような、一面的とも考えられるメアリー評価の確立は、神格化ともいうべき、ハックによる彼女の人格の絶賛の反復 (188, 202, 214) に起因していると考えられる。つまり、神格化を通して、メアリーに内在する暴力性の糊塗がなされている。加えて、先の彼女の姿勢 (199) は、ハックが殺害されたと誤認し、犯人と思しき父親を確たる証拠もなしにリンチにかけようとした *St. Petersburg* の住人 (68)、あるいは、真正の遺産相続人を詐称人物共々リンチにかけようとしたウィルクス家近隣の人々 (212) によって共有されている。つまり、彼女の暴力性も彼女固有の属性としては提示されていない。このような、メアリーの人物像の提示手法は、トム描写と通底している。

トムは、友人を配下として結成する自称盗賊団の規則を、“And if anybody that belonged to the band told the secrets, he must have his throat cut, and then have his carcass burnt up . . .” (21). と提示している。“anybody” の使用から分る通り、団長たるトム自身も例外なく規定への従属を強いられている。すなわち、トムは、些細な過失によって彼自身も殺害され、死体が焼却される可能性を伴う規定を嬉々として案出している。その後、トムはハックと共にフェルプス農場で捕縛されたジムの解放を企図する。ところが、計画の実行直前にトムはジムが強奪されようとしている事実を警告する文書を捏造し、ジムの現所有者サイラスに匿名で送る。その文書中にトムは、“[Y]ou slip there and lock them in, and can kill them at your leasure” (274). と記載している。この警告文が、サイラスに殺害を奨励している“them”とは、ジムの解放を目指す人物、すなわち、トム自身（とハック）を指す。このように、トムの登場する箇所はハックと比して圧倒的に微量だが、その中であって、自身が暴力によって殺害される想定を二回も嬉々として行っている。つまり、自己を暴力の対象として想定することへの傾倒が、トムにおいては非常に際立っている。この在り方は、すでに確認した、ハックの嗜好と酷似している。もちろん、トムは暴力に自己を実際に曝し、暴力によって実際に生じた自己の肉体の毀損に歓喜しており、この在り方はハックには見られない。つまり、保身欲の有無の点で、トムとハックは全く相反する感性を持つ。しかしながら、暴力に対するハックの基本姿勢が彼固有のものではない事実は、トムの描写を通して十分に示されている。以上のように、暴力性を登場人物の個性に帰属させる方向性の除去が、ハック、トム、メアリー、バックの描写に共通して認められる。

しかも、トムの登場箇所の大半を占めるフェルプス農場の場面で、トムは見知らぬ少年、次いで *Sid Sawyer* とフェルプス夫妻に対して詐称し、フェルプス農場における彼の *identity* は固定性が欠

如している。さらにハックはトムと詐称し続けることをトムから強いられる。しかも二人の詐称は難なく、周囲の人々によって受容され続けている。この形態でも、暴力性が潜在している登場人物の互換性が暗示され、個性化が排除されている。ところが、以上に確認できた、個別化回避の傾向と逆行する人物描写も複数認められる。この事実が有する意義を以下に考察したい。

IV 端役の個別化の徹底

フェルプス農場から、ハックとトムの助力によってジムが逃走した翌朝、フェルプス家には複数の隣人（男女）が参集する（41章）。それらの人々は、ジムの逃亡を阻止するために昨夜フェルプス農場に集った武装農民とその配偶者と推測されるが、この場面には暴力性の表象たる銃が登場しない。そのような、暴力的色彩を帯びていない隣人はサリーも交えて、ジム絡みの騒動について他愛のない対話を行う（283-85）。その際に、話者は我先に発言を行い、頻繁に他者の発言を遮る。ただ、フェルプス農場のサリーは、逃亡したジムの所有者であり、隣人を饗応する立場にもあるため、発言が尊重され話の腰は折られない。このように、周囲から発言の自由を与えられているサリーの2発話を除くと、隣人によってなされる13発話中、12が未完結である。さらに、それらの不完全断片的発話は、全てが、ジムが捕縛されていた小屋でトムが行った悪戯（隣人は、ジムと仲間の黒人によって為された行為と誤認）の大掛かりさに驚嘆の念を示している。そのため、村人の発話から伝えられる情報は、ハックの視点から十分に提供されてきた、読者の既知の情報の単調な反復に過ぎない。発話全体を通しては、子どもが行った悪戯に対して脅威の念を覚える農民の愚鈍さや、彼らにおける怯懦と粗暴性の共存などが伝えられる。しかし、これらも、既出の情報（274, 276-77）の単純な反復に過ぎない。しかも、各発言は類似性が強く単調である。そうであれば、各発話の未完結性とも相まって、13発話の有意性は極めて希薄である。

しかしながら、隣人による13発話の内、発話の主が不明なものは6に留まる。しかも、そのうちの4発話は一文のみで、かつ途中で遮られ、単語数も4から7に留まり、極端に断片的で発話の体をなしていない。それら4発話を除けば、9発話（8発話は未完）の内7発話の主語として、5人の固有名が割り振られ、有意性が希薄な発言ながら、その主が丹念に特定化されている。しかも、それら5名は、登場がこの場面限定された、ストーリー展開に全く関与しない些末的な人物である。対照的に40章の武装農民は銃撃でトムに重傷を負わせ、その結果、ジムは再度捕縛されており、ストーリー展開と密接に関与する。そのような彼らに関しては、個別的描写が徹底的に排除されていた。また、ハックが脳膜炎に罹患したというサリーの事実誤認ゆえに、ハックの様子を一斉に注視する既出の15名の武装農民（277）とは異なり、名前が紹介される5名の端役はハックに意識を向けることも絶無である。そもそも、5人とハックとの位置関係も、ハックが話を聞き取ることが可能な距離に位置している事実以外は、全く判然としない。以上の通り、ハックとの接触

度の濃淡や、ストーリー展開への貢献度の大小とは完全に逆行する個別化が、41章の端役5人にはなされている。5人には致命的暴力性が一切付随しない事実を視野に入れると、暴力行使の主体のみ個別化を回避せんとする作者の作為性が、より鮮明化する。

ここで、会話の体をなしている9発話の中で、例外的に発話の主が明示されていない2発話に注目すると、一つは、ジムの手助けを行った奴隷を突き止めるため（この発想は事実誤認に基づく）に、フェルプス農場の奴隷全員に対する“skin”（皮を剥ぐ）という対処を主張している。話者が特定化されていない発言の一つは、15発話の中で例外的に致命的暴力性を内包しており、作者の創作姿勢の一貫性に揺るぎはない。その一方で、後に登場する、再捕獲されたジムへの人道的な扱いを近隣住人に主張する村人は、人物像がすでに詳細に提示されている医師で、個別化されている(289)。最終的に、ジムは所有者の遺言状によって奴隷の地位から解放されていた事実が判明し、ジムに人道的な処遇が行われる(294)。その処遇を行う主体も、“aunt Polly and uncle Silas and aunt Sally”(294)と、固有名が明示されている。つまり、再捕獲されたジムに暴力を振るう村人が匿名であったのとは対照的である。

人物描写の基調の一貫性を探求するために別場面の端役を検討すると、Bricksvilleの浮浪者の会話の典型例をハックは直接話法で紹介している。その際には、浮浪者の相手に対する呼びかけを通して、5名の個人名が登場している。加えて、ハックが間接話法を使用して会話の典型例の紹介を行う場合にも、“[T]hey called one another Bill, and Buck, and Hank, and Joe, and Andy . . .”(155). という形で、さらに5名の話者の固有名が追加される。この箇所におけるハックの叙述の目的は、浮浪者全体が共有する退廃性を示すことである。そのため、話者の個別的提示に有意性はない。実際に浮浪者に関しては、“loafers with virtually interchangeable names”(Robinson 140)という指摘も行われている。さらに、浮浪者とハックとが接触する描写も皆無である。以上の前提にも関わらず、発話者が丹念に個別化（非匿名化）されている。これは、フェルプス農場での、断片的発話の主（存在感が希薄な端役）5名の個別化と類似している。ところが、動物に対する彼らの致命的な暴力行為が紹介される際の主語は、“they”が使用され、匿名化が図られている(156)。やはり、フェルプス農場での描写と同様、個別化されるのは、致命的暴力性を帯びていない登場人物に限られる。以上の二場面の端役に対しては、そもそも、個性や人物像を明示できるだけの字数が個々の描写に割かれていないため、固有名の配置は最大限の個別化といえる。

同様の視座から16章のraft episodeにも目を向けたい。商業的な理由から出版前に編集者は、トウエインにraft episodeの割愛を勧め、それに彼は同意している(Beidler 79)。その結果、初版からraft episodeは割愛されている。このような顛末から、raft episodeとメインストーリーとの連続性が希薄なのは明らかである。このようなエピソードの登場人物であれば、存在感も小さいはずだ。ところが、raft episodeに登場する13名の乗組員の6名に対して、固有名が割り振られている。Ed

による長尺の昔語りを終了した後、耳を傾けていた乗組員から 10 の質問が矢継ぎ早に寄せられている。それらの質問によって、昔語りの重要な局面が新たに明らかになるわけでもない。かように瑣末的な発話ながら、8つの質問の主に固有名が丹念に割り当てられている。その際には、初出の固有名も 2 つ付加されており、やはり、登場人物の個別化が目立つ。ここで、乗組員間で乱闘が生じるが、致命的な暴力性の発露はない点に注意したい。このように、独立性の高いエピソードにおいても、登場人物の描写基調はメインストーリーとの連続性を有している。

raft episode の直後に登場する副次的登場人物に目を移すと、筏に隠れている逃亡奴隷ジムの slave hunter による捕獲を回避するために、ハックは彼らに、筏に乗っている父が天然痘に罹患しているとの誤解を引き起こす虚偽の情報を伝える (112)。すると、ハックの虚偽の発言を真に受けた slave hunter は、伝染病の罹患を恐れてハックの筏から遠ざかる。その際に一人は、天然痘に罹患した父の処遇に苦慮しているハックを見捨てたという罪悪感から 20 ドル金貨を彼に与える。(もう一人の slave hunter も、同額をハックに与えるが、これは相棒の行動に触発された結果で、行動の主体性の点で二人には濃淡が存在する。) その際に彼らは、現在地よりも 20 マイル川下の地点で、父が天然痘に罹患している事実を口外せずに援助を求めることをハックに勧める。彼らは、天然痘患者の自分達の近辺への上陸を阻止できれば、他の街に感染の危険が及ぶことは全く厭わず、利己性を示している。とはいえ、ハックに譲渡する金額の大きさから、彼らに、ハックに対する博愛性を否定できない。彼らは、良心の存在ゆえに、大金をハックから詐取される被害者ともなり、読者の同情を誘う側面も有する。そのような二人組には、二人が行う会話(直接話法)を通して John と Parker という固有名が与えられている。この二人は銃で武装しているが、彼らが暴力性を発露することは一切ない。加えて、彼らの行動様式は、他の登場人物によって共有はされず、彼ら固有の在り方として(特に最初に金貨を渡すパーカーの場合)提示されている。このように暴力性が発露しない登場人物に関しては、個別化が一貫して展開している。

ここにおいて、致死性を伴う暴力の行使や志向を示す主体の特定化のみが強く忌避されている作品構造が明らかになった。この在り方は、本稿序盤に確認できた、最重要人物ハックに内在する暴力志向と彼の個性との分断を目指す作品構造の延長と位置付けることが可能で、この点で作品構造の統一性は強固といえる。この構造の背後には、作中人物の暴力性の発露は、個々の登場人物が有する個性に端を発するものではないという視座を指摘できよう。(この世界観が最も直截的に表現されているのが、グレンジャーフォード家とシェパードソン家の両家の男性の等質的な描写である。)つまり、発露されるもの、志向に留まるものを問わず、作中人物の致命的な暴力性は、周囲の登場人物との共同歩調の下に展開される総体的行動として提示されている。ここには、登場人物の個性や自由意思に基づいて暴力性の発露が主体的に選択されているのではなく、存在している場の空気によって致命的暴力性が誘発されているという世界観を指摘できる。この解釈は、暴力以外

の諸活動の主体に関しては一変して特定化が詳細になされ、時として個性に端を発する行動を行う存在として位置付けられていた事実を視野に入れることにより、説得力を増す。以下においては、そのような世界観の持つ意義を作品舞台の文化的特質と絡めつつ考察することにより、本作の暴力描写の核心に肉薄したい。

V 旧南部の特質に対する作者の意識

作品舞台の描写の特質に注意すると、逃亡奴隷や *slave hunter* など、旧南部固有の事象が頻出している。(旧南部とは南北戦争以前のアメリカ南部を指す。) さらに、殺害を実行に移す登場人物の中で固有名を与えられているシャーバン大佐は、群衆に対して、自己を南部人と明確に規定している (162)。実際に、彼は、旧南部におけるリンチに関する蘊蓄を饒舌にたれ、旧南部文化に精通している (162)。シャーバン大佐が話術によって群衆を怯ませる場面は、“With this scene, Twain underscores the unstated but understood truth that white royalty does in fact exist in the South” (Wieck 119). と解釈され、この場面に旧南部文化への作者の意識が反映されている点も指摘されている。その上、シャーバン大佐のエピソード全体に関する、“The scene manifests Twain’s concept of southern habits expanded . . .” (Sloane 97). という指摘もある。さらに、シャーバン大佐が殺害するボグズズに関して、“a stock comic character out of Southwestern fiction” (Sattelmeyer 367)、あるいは、“a comic figure lifted from Southwest humor” (Lenz 193) という形で、旧南部的色彩が指摘されている。加えて、暴力を行使する描写はないが、致命的暴力を強く肯定する人物として個別的に描かれている Col. Grangerford は、“the Southern aristocrat par excellence” と位置付けられる (M. Hoffman 36)。同様の視点から、“the somber beauty and stateliness of the Grangerford home” を “an icon to Southern gentility” と解釈する向きもある (A. Hoffman 33)。その上、一家に関しては、“Novelists of the 1870’s and 1880’s would have testified that Huck’s account of the way things went in the Grangerford household mirrored life in the ante-bellum South” (Blair 220). との観察も見られる。他にも、グレンジャーフォード家の描写に、“Twain’s attack on senseless codes of southern honor” (Carter 336) を読み取る向きもある。以上の先行研究の一貫性を見る通り、旧南部の現実の特質を再現する形で、シャーバン大佐とグレンジャーフォード家の描写は展開している。このように、例外的に固有名を与えられている、暴力性が色濃い登場人物は、旧南部社会の特質と緊密に関連付けられている。そうであるならば、旧南部社会の諸状況を、暴力性の誘発を招く要因と作品が位置付けている可能性を否定できない。この可能性について、現実の旧南部における暴力の実相を以下に確認することにより考察したい。

まず、旧南部は北部以上に暴力的な場であると何世紀にも渡って見做され、そのような旧南部の位置付けは北部人や、旧南部外の状況を認識している旧南部人らによって共有されていた

(Nisbett 1)。実際に 18 世紀以降、旧南部の通信文、自伝、新聞には、北部以上の頻度で、決闘、抗争、襲撃、リンチなどに関する報告が見られた (Nisbett 1)。この指摘の妥当性は、“From the 18th century on, memoirs, travel narratives, and diaries from the South revealed an attention to southerners’ seeming penchant for violence, recording acts of feuding, dueling, fistfights, and vigilantism, not seen in comparable accounts from the North” (Wood 3-4)。という同一趣旨の観察によって強化される。さらには、旧南部に関して、“[C]onflict with them [Southerners] could only mean immediate physical clashing, could only mean fisticuffs, the gouging ring, and knife and gun play” (Cash 43)。という形で、対立関係がナイフや銃を用いての闘争に発展する可能性の高さが指摘されている。加えて、“They [Southerners] made violence a part of the social order even in the upper ranks But in actuality violence pervaded all the white social classes” (Wyatt-Brown 352-54)。と、旧南部では暴力性が白人の全ての階級に浸透し、社会秩序の一部になっていたとの観察もある。さらには、旧南部における “the presence of so much violence in formal, public arenas” (Edwards 297) を指摘する声もある。

以上の指摘の一貫性から存在が明らかな、暴力性が広範に浸透した旧南部の現実と、旧南部で生育したトウェインの日常との関係を確認すると、“[B]efore the age of 17 he [Twain] had witnessed the abortive lynching of an abolitionist, a death by fire, a hanging, an attempted rape, two drownings, two attempted homicides and four murders” (Beaver, *Huckleberry* 11)。という指摘がある。この引用の通り、トウェイン自身、生地の旧南部において数多くの殺人や暴力行為を目撃している。その上、11 歳時のトウェインは遊んでいる最中に逃亡奴隷の切断死体を目撃もしている (Fishkin 21-22)。さらには、Cooley の指摘によると、作中のシャーバン大佐によるボッグズ殺害は、トウェインが 10 歳の時に彼の居住地で現実生じた殺人に基づいて叙述されている。トウェインの父は治安判事としてこの事件の目撃者からの 28 の宣誓証言を集め、報酬を得ている (159)。このように、トウェインは周囲の人々が致命的暴力を日常的に発露する社会の中で生育していた。

以上の通り、旧南部にあっては致命的暴力の行使は常態であり、非日常的な行動ではなかった。殺人的な暴力も、日常風景の一部にしか過ぎなかった。トウェインは、そのような現実を日々、体感する立場にあった。このような、作者が直面せざるを得なかった旧南部の暴力に係る実態を、既に確認した、個人の選択ではなく場の空気によって自然発生的に暴力行為が生じるという本作の世界観は、再生産している。ここで、娯楽やゲーム、スポーツにすら致命的な暴力性が伴った旧南部の現実 (Nisbett 1-2) に注目したい。すると、10 代前半のトムが主導する仲間との遊びにおいて、致命的な暴力の行使が何度も想定されているのは (20-22)、現実の投影だと判明する。さらに、旧南部人の暴力的技能が卓越していたため、旧南部人は軍人として名声を博する例が多く、また、旧南部人は北部人以上に戦場での武勇に多大な誇りを覚えていた (Nisbett 2)。これらの現実も、大佐の呼称で呼ばれる二名の人物 (シャーバンとグレンジャーフォード) の登場に反映されている。こ

これらの点からも、作者は旧南部の暴力の実相を強く意識しつつ、それらを復元する方向性の下に作品世界を構築していると考えられる。以上の見解は作者の伝記的事実を視野に入れることによって説得力を増す。

1835年の生誕後、旧南部で大半を過ごしたトウェインは、1871年に北部 Connecticut の Hartford に移住し、ここに以降 20年間居住する (Rasmussen 144, 189, 196, 413)。その際の彼の生活は、“his entrance into polite Eastern society” (Emerson 128) と評され、トウェイン自身も、“its moral and moralizing atmosphere” をハートフォードの特徴として指摘している (Steinbrink, *Getting* 189)。あるいは、当時の街の雰囲気や “peaceable” と指摘する向きもある (Kaplan 140)。その結果、トウェインは “the organized intellectual life” (Andrews 102) の中に身を置くことになり、生誕地の旧南部とは全く異質な空気に触れることになる。他方、致命的暴力行為の横溢を旧南部固有の特質として認識していた人々の例として、“southerners with experience outside the South” (Nisbett 1) が挙げられ、ハートフォード在住時のトウェインは、まさにこの条件に合致する。一方、本作の執筆は、彼がハートフォードに移住してから 5年が経過した 1876年 7月に開始されている (Quirk 10)。つまり、本作執筆時にトウェインは旧南部人の行動様式の客体視を特に促される環境に置かれていた。このような、彼の伝記的事実を視野に入れば、特異な暴力性という旧南部文化の一面を、トウェインが強く意識した上で作品執筆を展開したのは、必然的な帰結であったと判断できる。

結語

ハックが提示する虚構に内在する法則性や、文の主語の選択に付随する規則性は、個別的に視野に入れる限りにおいては瑣末的な事象と映る。しかしながら、それら二つの事象は作中で密かに連携しつつ、旧南部人の暴力の様態に関する固有の世界観を醸成し、旧南部の現実を象徴的に表現する機能を発揮していた。加えて、本作において醸造されている旧南部人の行動様式に関する世界観は、旧南部外の文化と生活様式に接した作者が旧南部を客体視した際の彼の心象風景を伝えるものであると推測できた。そこでは、個々人の意志よりもむしろ、場の空気や行動が制御される旧南部人の姿が描かれていた。他方、Maeda は、逃亡奴隷ジムの逃亡の手助けを実行することをハックは繰り返し宣言しながら、実際に彼が取る行動はジムの逃亡を阻害するものが大半を占める事実に着目し、ハックの個性や自由意思の存在にもかかわらず、旧南部に圧倒的に偏在していた白人の思考様式にハックが絡めとられ、そこから脱却できていない事実を指摘した (“A Reconsideration” 2-12)。そうであるならば、トウェインは、旧南部の場の空気によって、老若を問わずに行動が支配される旧南部人の宿命を、本作において多面的に描き出しているといえる。

トウェインは、1876年に本作の 16章までを執筆した後、長期間の執筆中断を挟んだ後に、1879年から 1980年の間の何れかの時点で作品執筆を再開している (Steinbrink, “Who” 90)。この長期間

の中断の前後で作品基調や作中の社会への視座が大きく変化している事実を、複数の批評家が一致して指摘している (Bellamy 344, Blair 152, Lynn 219, 236-40, 244, Sattelmeyer 365, Smith 116, Stone 144)。このような、作品の統一基調の希薄さにもかかわらず、本稿で確認した通り、全体を貫く統一性も存在しており、それは、暴力に係る旧南部人の宿命を浮き彫りにしていた。そうであるならば、生育した環境とは異質な北部の空気の中での生活の結果、旧南部の暴力に係る特質を客体視するに至ったトウエインの視点こそが、作品の統一性の源泉となっている。つまり、作品執筆中のトウエインの旧南部社会の暴力性への意識は、作風の不統一を大きな特徴とする本作に、作品構造の精緻な統一性を付与するほどに先鋭なものであったのである。

註

1 この場面とは対照的に、詐欺師二人が加えられたリンチに対してハックは強い嫌悪感を覚えている (239)。この反応からは、一見するとハックの暴力への嫌悪感が読み取れ、この点に着目した論考も複数見られる (Brodwin 383, Marx 43, Shulman 333, Wieck 79)。しかし、本場面のリンチに対するハックの反応の本質を見極めるには、二人のリンチが逃亡奴隷ジムの密告により生じた事実と、ハックの奴隷制度に対する認識の本質を視野に入れつつ考察を行う必要がある。この詳細に関しては、Maeda を参照のこと (“Re-reading” 7-11)。

Works Cited

- Andrews, Kenneth R. *Nook Farm: Mark Twain's Hartford Circle*. Seattle: U of Washington P, 1969.
- Beaver, Harold. *Huckleberry Finn*. London: Allen & Unwin, 1987.
- . “Run, Nigger, Run.” *Champion* 187-94.
- Beidler, Peter G. “The Raft Episode in *Huckleberry Finn*.” *Champion* 79-86.
- Bellamy, Gladys Carmen. *Mark Twain as a Literary Artist*. Norman: U of Oklahoma P, 1950.
- Blair, Walter. *Mark Twain & Huck Finn*. Berkeley: U of California P, 1973.
- Brodwin, Stanley. “Mark Twain in the Pulpit: The Theological Comedy of *Huckleberry Finn*.” Sattelmeyer and Crowley 371-85.
- Carrington, George C., Jr. *The Dramatic Unity of Huckleberry Finn*. Columbus: Ohio State UP, 1976.
- Carter, Everett. “Grangerfords, The.” *LeMaster* 336-37.
- Cash, W. J. *The Mind of the South*. 1941. New York: Vintage, 1991.
- Champion, Laurie, ed. *The Critical Response to Mark Twain's Huckleberry Finn*. Westport: Greenwood, 1991.

- Cooley, Thomas. Annotation, *Adventures of Huckleberry Finn*. By Mark Twain. New York: Norton, 1999.
- Covici, Pascal, Jr. *Mark Twain's Humor: The Image of a World*. Dallas: Southern Methodist UP, 1977.
- Doyno, Victor A. *Writing Huck Finn: Mark Twain's Creative Process*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1991.
- Edwards, Laura F. "Law, Domestic Violence, and the Limits of Patriarchal Authority in the Antebellum South." *The Old South: New Studies of Society and Culture*. Ed. J. William Harris. New York: Routledge, 2008. 295-319.
- Emerson, Everett. *The Authentic Mark Twain: A Literary Biography of Samuel L. Clemens*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1985.
- Fishkin, Shelley Fisher. *Lightning Out for the Territory: Reflections on Mark Twain and American Culture*. New York: OUP, 1997.
- Fulton, Joe B. *Mark Twain's Ethical Realism: The Aesthetics of Race, Class, and Gender*. Columbia: U of Missouri P, 1997.
- Gabler-Hover, Janet. "Wilks Family." LeMaster 792-93.
- Harris, Susan K. "Huck Finn." *Huck Finn*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1990. 73-81.
- Hoffman, Andrew Jay. *Twain's Heroes, Twain's Worlds*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1988.
- Hoffman, Michael. J. "Huck's Ironic Circle." *Mark Twain's Adventures of Huckleberry Finn*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1986. 31-44.
- Kaplan, Justin. *Mr. Clemens and Mark Twain: A Biography*. New York: Touchstone, 1983.
- LeMaster, J. R., and James D. Wilson, eds. *The Mark Twain Encyclopedia*. New York: Garland, 1993.
- Lenz, William E. "Confidence and Convention in *Huckleberry Finn*." Sattelmeyer and Crowley 186-200.
- Levy, Andrew. *Huck Finn's America: Mark Twain and the Era That Shaped His Masterpiece*. New York: Simon & Schuster, 2015.
- Lynn, Kenneth S. *Mark Twain and Southwestern Humor*. Westport: Greenwood, 1972.
- Maeda, Johji. "Huck and Slavery: A Reconsideration of His Attitude towards Jim." *Kyushu American Literature* 52 (2011): 1-14.
- . "Huck and Slavery: Re-reading the Wilks Episode in *Adventures of Huckleberry Finn*." *Kyushu American Literature* 50 (2009): 1-13.
- Marx, Leo. *The Pilot and the Passenger: Essays on Literature, Technology, and Culture in the United States*. New York: OUP, 1989.
- Nisbett, Richard E. and Dov Cohen. *Culture of Honor: The Psychology of Violence in the South*. Boulder: Westview, 1996.

- Quirk, Tom. *Coming to Grips with Huckleberry Finn: Essays on a Book, a Boy, and a Man*. Columbia: U of Missouri P, 1993.
- Rasmussen, R. Kent. *Mark Twain A to Z: The Essential Reference to His Life and Writings*. New York: OUP, 1995.
- Robinson, Forrest G. *In Bad Faith: The Dynamics of Deception in Mark Twain's America*. Cambridge: Harvard UP, 1986.
- Sattelmeyer, Robert. “ ‘Interesting, but Tough’: *Huckleberry Finn* and the Problem of Tradition.” Sattelmeyer and Crowley 354-70.
- Sattelmeyer, Robert, and J. Donald Crowley, eds. *One Hundred Years of Huckleberry Finn: The Boy, His Book, and American Culture*. Columbia: U of Missouri P, 1985.
- Shulman, Robert. “Fathers, Brothers, and ‘the Diseased’: The Family, Individualism, and American Society in *Huck Finn*.” Sattelmeyer and Crowley 325-40.
- Sloane, David E. E. *Adventures of Huckleberry Finn: American Comic Vision*. Boston: Twayne, 1988.
- Smith, Henry Nash. *Mark Twain: The Development of a Writer*. Atheneum: Atheneum, 1974.
- Steinbrink, Jeffery. *Getting to be Mark Twain*. Berkeley: U of California P, 1991.
- . “Who Wrote *Huckleberry Finn*?: Mark Twain’s Control of the Early Manuscript.” Sattelmeyer and Crowley 85-105.
- Stone, Albert E., Jr. *The Innocent Eye: Childhood in Mark Twain’s Imagination*. N. p.: Archon, 1970.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. 1885. New York: Norton, 1999.
- Walker, Nancy. “Reformers and Young Maidens: Women and Virtue in *Adventures of Huckleberry Finn*.” Sattelmeyer and Crowley 171-85.
- Wieck, Carl F. *Refiguring Huckleberry Finn*. Athens: U of Georgia P, 2004.
- Wood, Amy Louise. *Violence*. N. p.: U of North Carolina P, 2011.
- Wyatt-Brown, Bertram. *Southern Honor: Ethics & Behavior in the Old South*. Oxford: OUP, 2007.
- 金谷良夫. 「トウェインと暴力」. 『アメリカ文学と暴力』. 東京: 研究社, 1995. 81-152.

